

都会の人たち (私たちの生活) 小学校第五学年用

昭和二十三年三月十一日翻刻印刷

一、私の家

月 日

じゅん子

私の家は、ちよとふしぎな家です。おじさんはおとうさんの家だといわれるし、おとうさんは、おじさんの家を借りているのだといわれるのです。

もともこの家は、今から二十年ほどまえ、まだこのへんがいなかであまり家のたっていないころに、おじさんがとなりの家といっしょに買われたものです。そのときおとうさんが自分で買いたいといわれたのに、おじさんが、「そんなによい家ではないから、別の家を買いなさい。それまで自由に使いなさい。」といて、とめられたのです。

となりの家はへや数も多く、庭もかなり廣くてよい家です。おじさんたちが疎開したあと、ある会社の宿舎として貸したのですが、終戦後もそのままになっています。それで、疎開から帰ってきたおじさんたちは、私たちの家にいっしょに住んでいられるのです。となりの家は会社の宿舎なので、人数もふえたり、へったりしていますが、私たちの家よりゆっくりしているようです。

よその人の話をきくと、家のことでは、ずいぶん争いが多いようです。友だちや親類がけんかをしている例はたくさんあります。弟さんがにいさんの家を借りていながら、にいさんたちを同居さえさせないという例もききました。警察に争いをもってくる人も多いそうです。

私たちの家は、平家で、八畳・六畳・四畳半・三畳・二畳・二畳です。東がわは、となりの台所とほとんどくっついており、南がわの小さい庭の無効にも家があって、あまり明るくありません。三畳は玄関で、二畳は二つとも物置になっています。

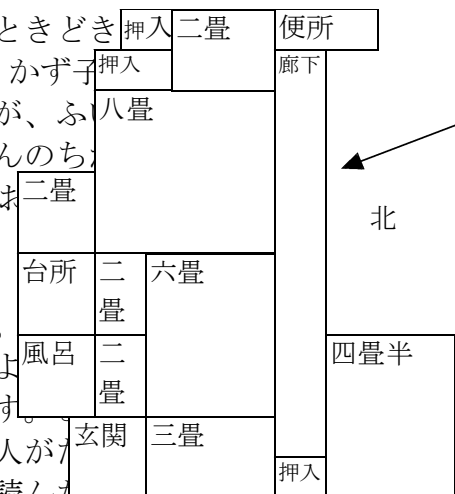
私たちの家には九人住んでいます。おじさんおばさんに、いとこのかず子さん、とし子さん、道男さん、これだけで、六畳と四畳半を使っています。お父さんお母さんに、敬一にいさんと私、この四人が八畳を使っています。とし子さんは中学一年、おにいさんは中学二、私と道男さんが五年です。

朝と晩には、九人がそろって六畳で食事をしますが、ときどき「まったく満員電車ようだ。」といて笑っています。かずさんは、夜は玄関の三畳で勉強したり、ねたりしていますが、ふにベルがなるとおおさわぎです。かずさんのおねえさんのちか子さんがおよめにいかれるまでは、十人でしたから、な

んでした。
おじさんは、六六ですが、会社につとめていられます。んは、どんなときにもおこったことはありません。どのよとでも、「それもよかろう。」とさんせいしてくださいます。からそうだったので、今でもわすれないでたずねてくる人がさんあります。夜はラジオをきいたり、おそくまで本を読んたなさいます。朝は早く起きて、近所を散歩なさいます。

おとうさんは、五四で、まえにはほとんど病気をなさったことがありませんでしたが、戦争中、お役所につとめていて学校の子取り

どもの疎開のことでむりをして働いたため、だいぶからだ弱くなりました。いそがしいときがつづいてつかれがはげしくなると、夜中に急にひきつけ



↑ 私の家の間

て、何もわからなくなってしまうのです。それで、うちじゅうでよく氣をつけて、あまりおつかれにならないように注意しています。

おとうさんも、ほとんどおこることはありません。まえには化学の先生でしたが、今はある中学校の校長です。

小さなことでもよく考えて意見をいわれます。勉強のことをうかがうと、いつもにこにこしながら教えてくださいます。おとうさんの一番きれいなことはきょうだいげんかです。私がいさんといいあらそいなどをすると、注意をなさいます。おとうさんは、毎日満員の電車で、往復三時間もかかって通勤されるので、夜はいちばんさきにねてしまわれます。

このあいだ、おとうさんのおのりになった市内電車が石炭を積んだトラックと正面しょうとつをしました。おとうさんはまんなかののっていたので無事でしたが、両方の運転手さんと電車の前の方にのっていた人が死にました。いきなりドシンと電車がとまると、のっていた人はみなしょうぎだおしになり、バラバラッと屋根の上に何か落ちてきました。びっくりしてまえの方をみたら、まっくろなものがあり、運転台はメチャメチャにこわれていたそうです。おとうさんは、トラックがむちゃをしたのだらうといわれました。乗客のためにいっしょうけんめい運転をしていた運転手さんやお客さんが、あつというまに死んでしまったことは、本当に氣の毒だと、おとうさんはくりかえして話していられました。働き手を急に失った運転手さんのおうちでは、どんなに困ることでしょう。交通局や組合でできるだけのことをするとしても、十分とはいかないだらうということです。おとうさんは、電車はやっぱりまんなかののらなくてはいけないと、しみじみいわれましたが、私はおとうさんがまたそのようなあぶない目にあわなければいいがと思って心配しています。

おばさんは、五六、おかあさんは、五二で、ほんとうのきょうだいです。たいへんなかがよくて、炊事も、せんたくも、買物も、みな助けあってやっていますので、おかあさんがふたりいるようです。戦後はどの家にも二家族も三家族もはいますが、私たちの家のように、台所をいっしょにしている家はあまりなさそうです。たべものやかかりのことになると、このごろはきょうだいでもうまくいかないことが多いようです。ふたりで道路のむこうがわのあき地の畑を、五〇坪ばかりたがやしていられます。おじさんもおとうさんも私たちもてつだいますが、おかあさんたちがいちばんねっしんです。

かず子さん、とし子さんをはじめ、みんなが掃除や後片付などのおてつだいをしますが、おかあさんがたは、朝早くから夜おそくまで、仕事をしていられます。「小さい子どももないし、家も廣くないけれど、女の用事はきりがない。」といわれます。

たべものや着物のことなどは、すべておかあさんたちの考えできまります。どんな代用食でも、どんなおべんとうでも、おじさんも、おとうさんも、だれもくじょうをいいません。

うちでは、「どちらも荷物を焼きませんでしたから、戦災や引き上げの親類や知り合いの人たちに、だいぶ分けてあげました。それで今は、着物、とくに下着類やくつした・ふとん・しきふなどに困っています。おかあさんがたの夜の仕事は、そのつくろいが大部分だともいえます。おばさんやおかあさんは、昔からなんでもたんねんに手入れをして、たいせつにとっておかれたので、今役にたつものがだいぶあります。

食糧もずいぶんたいせつに使っています。配給されるものは、種類や質がちがうことがおおいので、それを区別して、しまっておいて使います。

予備のお米は、大きなガラスびんに入れて、虫のつかないようにしてありますが、遅配がつづく、目にみえてへっていき、心細くなります。お米の配給がきちんとあれば、朝と晩はおかゆや代用食にして、少しずつお米をためていきます。配給の粉はさまざまですから、まぜて使います。豆などは、よいのやわるいのや、色のちがうのなどがまじってることがあり、そんなときには、より分けて使います。にえかたもちがうし、味もちがうからです。イーストをとっておいてパンをこねたり、代用食をつくったりする苦心はよう

いではありません。野菜は家の畑からもとりますが、人数が多いので、配給のうまくいかないときには困ってしまいます。知りあいの農家まで分けてもらいにいくことも少なくありません。庭のすみにいけていたり、かわかしてとっておいたりしたものを使います。

ぬかや塩が不自由ですから、つけものもふだんはたべません。おさかなもそう順調にはきませんし、みそやしょうゆもおくれがちですから、おばさんとおかああさんで、「何をどうしてたべたものやら。」とって話しあわれることもしばしばあります。

おとうさん、おじさん、かず子さんなどが、おつとめ先の組合で安いものを買ってこられることもあります。家の近くには、生活共同組合というものがあり、うちもはいつていますが、ちかごろは、なかなか思うように物が手にはいりません。かず子さんが熱心な賛成者で、ときどき、おばさんたちと、話しあいをなさることがあります。

かず子さんは小さい子どものそだてかたを研究する所につとめていて、ふだんは、町や村の託児所や保健所をまわっていますが、農はん期などには、村の託児所のせわをしにいわれます。

燃料は、どこの家でもたいそう困っているようですが、私たちの家でも、となりの家のほうの庭の木をきったり、古くなった物置などをこわして、まきをつくり、それをたいせつに使っています。そして、なるべくガスの出るときや電気の強くなるときをみはからって、にたきをします。

火なしコンロが、おかま用、おなべ用と二つもつくってあって、おかゆをにる燃料を節約したり、にたきしたもののひえるのをふせいだりします。おかゆなど、にたったところで、この火なしこんろに入れておくと、別に熱を加えなくても、どろりとしたおいしいおかゆになります。近所のうちで電気を使う時間はたいがい一致していて、そのときは弱くなりますから、私たちの家では、なるべくそのときをさけてにたきをします。それには、火なしこんろがたいそう役にたちます。お湯をわかしてとっておくには、まほうびんを使っています。

電気こんろやガスこんろは、まわりや下に熱がにげないように、うちがわにとたん、そとがわが木、底がいしわたの箱をつくり、そのなかに入れて使っています。これはみんな、おとうさんが考えておつくりになったのです。おふろも、燃料の関係で、特別の日にかわかしません。ふだんは、銭湯に行くのですが、おつとめにいくおとうさん、かず子さんは、お困りです。

水道は給水所に近いためか、わりあいによく出ます。場所によっては、だいぶ出が悪く、バケツなどでためておかないと困る家もあるというのに、ありがたいことです。

私たちの家では、朝と晩のごはんのときが楽しいか時間です。たいていの日には、九人がみなそろいます。そして、いろいろなおもしろい話をします。朝は、おじさんの散歩の時のお話がよく中心になります。畑の作物のこと、お天気のこと、肉屋の犬のこと、小鳥のこと、新聞配達の子どものこと、交番のおまわりさんのことなどがあって、私たちまでおなじみになったような気がします。晩には、みんながおもしろい話をします。話がありすぎて、おとうさんとおじさん、おかあさんとおばさんやかず子さん、おにいさんととし子さんと私たち、というような組になってしまうことさえあります。政治のこと、配給のこと、電車内のできごと、学校での行事、お店のこと、お客さまのことなど多く話されます。ときには、昔のことなどもいろいろ出てきます。私たちの小さかったときのことなどが話されると恥ずかしくて困ることがあります。

うちじゅうでおとうさんのお友だちのいるいなかの方へ出かけて、野菜やいも類などをいただけてくることも、ときどきあります。るすばんは、おじさんかおかあさんのことが多いようです。川の上流で景色もよいので、ハイキングをかねていて、私たちの楽しみの1つです。そのときの計画は、おにいさんを中心に、私たちでたてます。いつごろの電車がすいているかということなどを、おにいさんはたいへんよく研究しています。

本は、だいぶいろいろなものがあるので、本を読むこともうちじゅうのもののお楽しみになっています。お友だちなどがみえても、せまくて遊びまわれないので、たいてい本を読んで遊びます。

ちくおんきやオルガンも、もとはありましたが、今は疎開したままになっていて、ラジオを聞いて楽しむだけです。

家の人たちの楽しみを表にしてみました。

おじさん	散歩、碁、読書（政治、経済、歴史など）
おとうさん	畑づくり、写真、読書（科学、科学者の伝記など）
おばさん	買物、裁縫、日本音楽
おかあさん	畑づくり、料理、生花
かず子さん	テニス、料理、西洋音楽、映画、読書（歴史、科学、文学などさまざま）
敬一にいさん	フットボール、植物採集、読書（科学）
とし子さん	裁縫、ししゅう、読書（旅行記、小説、植物の本）
道男さん	野球、模型の製作、ハーモニカ、読書（科学、工作など）
じゅん子	畑づくり、裁縫、押花、読書（動物などのものがたり）

私たちの家は、本当に満員電車です。でも、みんなが助けあっている楽しい満員電車です。

となりの家があいたら、ちか子さんたちもよんで、そこでまたいっしょにくらそうといっています。そうなったらどんなにうれしいことでしょう。そして、おとうさんは、この家はお友だちに貸してあげたいといっています。そのかたは、九人家族で、毎日、片道三時間もかかるところからお役所にかよっているのだそうです。

二 図書委員になって

月 日 道 男

このあいだ転校していった水谷君のかわりに、僕が図書委員に選挙された。きょうの自治会では、水谷君の手紙を読んだり、学級文庫をよくすることを相談したりした。

水谷君の手紙は、もうひとりの図書委員の中村まさ子さんが読みあげた。水谷君は、こんどいった学校の図書室や学級文庫のことを知らせたあとで、さっそく県立図書館にお友達と見学にいったときのことをくわしく書いてくれていた。それは次のようである。

県立図書館は、公園のなかにあります。おとなの入口と子どもの入口とは別になっています。係の人に、先生からの手紙を出すと、それではおとなのほうから案内してあげましょうと、おとなの入口の方へつれていってくれました。おとなの方の入口で料金をはらって、閲覧証という番号のついて用紙をもらいます。ぼくたちは、番号のついていないのを一枚ずつ貸してもらいました。それには自分の住所・氏名・職業・年れいなどと、読みたい本の名を書くところがありました。

階段をのぼると、引き出しのついた箱がいくつもならべておあります。いくにんもの人が引き出しをぬいて、そのなかにあるカードで本をさがしていました。ここは目録室といって、借りたい本の名がわかっている人には、その本の番号を教え、しらべたいことがきまっても、どんな本がよいのかわからない人には、本の名やその番号を教えてくださいと、

第 号

閲覧証番号		〇〇〇〇図書館		交付年月日	
普通図書閲覧票					
図書は目録及び書架に就いてお探しの上本票にその番号と書名を明記して出納所にお出しください。					
本の番号		書	名	冊数	受領

住所	区 町 丁目 番地 方				
職業		姓名			

本を書いた人の名前からも、その図書館にある本をさがすことができるそうです。係の人が何か見たい本がありますか、といわれるので、ぼくは、いつか先生にみせていただいた「水産の話」という本です、といったら、スの字の所を引いて、番号を教えてくださいました。ぼくたちは、その本の名と著者の名や番号を、さっきの閲覧証に書いてみました。係の人はもうひとつの引き出しに、水産についてのいろいろな本のカードがあることを教えてくださって、一冊だけ見たい本を書いたのでは、その本をほかの人が借りている場合もありますから、水産についての本を何冊か申しこむほうがよいと、教えてくださいました。

この用紙をもって、次の室の出納係の所へ行きました。ここではおおぜいの方が、本をもってきてくれるのを待っています。出納手の少年が、たくさん本をかかえて書庫

から出てきました。出納係の人はそれを受け取ると、閲覧証にあわせて、その名をよんで、本を渡します。

案内の人はぼくたちの閲覧証をもったまま、事務室とのしきりになっているひらき戸をあけて中にはいりました。そしてぼくたちにも、はいるようにいわれました。

ぼくたちは、事務室をぬけて、書庫に案内されました。大きな鉄のとびらが、両方におもおもしろくひらかれています。書庫のなかは暗くて、電燈がついています。高い本だなが何十とならんでいて、そのおもてにもうらにも、本がぎっしりと、よく整頓されてならべられています。古い新聞がひと月ごとにとじこまれていて、それが何枚かの、ぶあつい板のように、きちんと整理してある所もありました。また、古い雑誌が製本してならべてある棚もありました。本には、みな番号がついていて、その順にならんでいました。

係の人は「水産の本」を番号にあわせて、たなの上の方からさがし出してみせてくださいました。いつかの本とおなじで、なつかしい気がしました。「水産の話」をもとの所におさめてから、ぼくたちは、書庫を出て事務室にいきました。まぶしいほど、急に明かるく感じました。

事務室の人たちは、新しい本を注文して買ったり、いたんだ本を修理させたり、本の目録をつくったり、本や閲覧者についての各種の統計をつくったり、書だなの整理や本の虫ぼしをしたり、館外貸出票の整理をしたり、思いがけないほどたくさんの仕事をしていることがわかりました。

ぼくたちが書庫を減額しているあいだに、出納手の少年が、何度も何度もいききして、本を引き出していきました。はしごをあがったり、おりたり、重い本を何冊もかかえて、いそぎ足で歩きまわる仕事は、ずいぶんつかれることだろうと思いました。夜学にいつている人も、昼まは学校にいつて、夜働いている人もいるそうです。図書館につとめている人は、いくらでも本が読めていいと思っていましたが、なかなかそんななまやさしいことはなさそうです。

事務室を出てから、おとなの閲覧室をのぞきました。大きな机にそれぞれスタンドがついていて、たくさんの人が静かに本を読んだり、書きものをしたりしていました。つかれたのか、いねむりをしている人もありました。

入口で閲覧証をかえして、公園に出ると、なんだかほっとしました。もう一度、子供の入口をとおって、児童閲覧室の方へいきました。ここは、ぼくたちの世界で、たいそう明

かるく気持のよい室です。

入口で料金をはらうこともありません。閲覧票は、係の人の机の箱に入れてあります。本だなが事務室と閲覧室とのあいだにあつて、ほしい本のあるなしがすぐわかります。しかし、本だなのこちらがわに金あみがあるので、すぐとるわけにはいきません。やはりその本の番号や、名まえを閲覧票に書きこんで、係の人に事務室の方からとってもらうのです。小さな目録箱も用意してあつて、金あみの本だなにない本で、ぼくたちに読めそうな本が、さがせるようになっています。

窓がわの本箱には、すぐとって読めるよう

外国のおもな図書館
(蔵書数 100 万冊以上のもの 1926 年現在)

館名	創立	蔵書	館名	創立	蔵書
大英博物館文庫	1753	万冊 300	レニングラード 国立公共図書館	1814	万冊 420
ケンブリッジ 大学図書館		120	レニングラード プーシュキンの家	1905	112
オックスフォード 大学ボドレー図書館	1602	104	ニューヨーク 公共図書館	1891	254
パリ国民図書館	1518	414	ハーバード大学 図書館	1638	232
ストラスブール 大学・地方図書館	1871	130	シカゴ公共図書館	1872	167
ミュンヘン バイエル国立図書館	1558 ～ 71	155	ボストン市 公共図書館	1854	144
ウィーン 大学図書館	1775	105	エール大学 図書館	1704	139
(ナポリ) ヴィクトルマニ ニエリ三世王立国民図書館	1734	101	ニューヨーク市 コロンビア大学図書館	1754	136
マドリード 国民博物館文庫	1716	116	クリーヴランド 公共図書館	1869	130

わが國のおもな図書館
(昭和21年5月1日現在)

蔵書冊数5万冊以上のもの (単位千冊)

館名	蔵書	館名	蔵書
国立図書館	1038	縣立佐賀図書館	63
秋田縣立秋田図書館	115	長崎縣立長崎図書館	119
行幸記念山形縣立図書館	55	鹿児島縣立図書館	72
福島縣立図書館	61	市立小樽図書館	55
御成婚記念千葉縣図書館	69	函館図書館	85
都立日比谷図書館	50	前橋市立図書館	61
都立駿河台図書館	61	横浜市立図書館	71
明治記念新潟縣立図書館	104	金沢市立図書館	70
紀元二千六百年記念富山縣立図書館	65	市立飯田図書館	109
石川縣立図書館	90	市立名古屋図書館	67
縣立長野図書館	72	市立名古屋公衆図書館	85
葵文庫	64	神戸市立図書館	137
京都府立京都図書館	196	成田図書館	140
大阪府立図書館	350	財団法人岩瀬図書館	90
奈良縣立奈良図書館	84	財団法人大橋図書館	190
和歌山縣立図書館	69	慶応義塾藤山工業図書館	65
鳥取縣立鳥取図書館	59	叡山文庫	73
島根縣立松江図書館	56	天理図書館	160
山口縣立山口図書館	103	財団法人鎌田共済会図書館	57

な本がきつしりとならべてあります。これは、閲覧票に書かずに読んでもよいのです。三、四年生は、おもにこのほうを読むようです。係の人は四人ほどいて、ときどきみんなの読んでいるようすをみまわったり、どんな本をよんだらよいのかということの相談にのってくれたりしています。ぼくは、館外貸出のしかたをきいたり、それに必要な申込用紙をもらったりしました。事務室にいつてからは、図書室の始まり、日本の図書館の数、外国の図書館のありさま、図

既設図書館数	
設立者	館数
国立	1
府縣立	73
市立	200
町立	504
村立	1669
組合立	38
私立	854
計	3398

書館を利用する人たち、図書館で困ることなどについて、かわるがわる筆問しました。みなさんやぼくのもう知っていることもあったわけです。図書館で困ることは、やはり本がなくなったり、本をよごしたり、その一部分をきりとったりする人のあること、なかなか買いにくいこと、閲覧室がせまくて、希望する人全部を、待たせないで入館させることのできないこと、などということを書きました。

水谷君は、リンカン伝と小公子の二冊の本をぼくたちの学級文庫に寄付してくれた。そこで、ぼくから水谷君に礼状をあげることになった。

学級文庫と交換すること、本をもっと増やすこと、本の整理をすること、などもきまった。

学級文庫の交換は、中村さんと僕から、他の学級に話すことになっている。本を増やすには、学級で花を栽培し、これを売って、そのお

金で本を買ってはどうか、という意見があつて、本の修理は来週の仕事の時間に、のりと糸とあつ紙をもちよつてすることになった。

先生は図書部の仕事はこれからいっそうたいせつになるといわれたが、ぼくもみんなのためにしっかりやろうと決心した。

三、大きな病院

月 日 じゅん子

大学病院に二〇年以上つづけてつとめていられるおじさんが、久しぶりにおとうさんのおみまいかたがたおみえになって、おとうさんを診察して下さったあと、私たちに病院のお話をしてくださいました。

おじさんのつとめている病院は、四階建の建物で、そのなかに、内科・外科・産婦人科・小児科・眼科・耳鼻科・歯科その他の科があって、すべてろうかずつたいにれんらくできる、大きな病院だそうです。ベッド（病床）の数が、八〇〇ぐらい合って、大学病院のなかでは、大きいほうです。しかし、外国の大病院と云ったら、とてもそんなものではなく、アメリカあたりにはこの二〇倍もある病院があるそうです。それからみると、おじさんのところなどは、小病院といわなければならない、とのことことです。

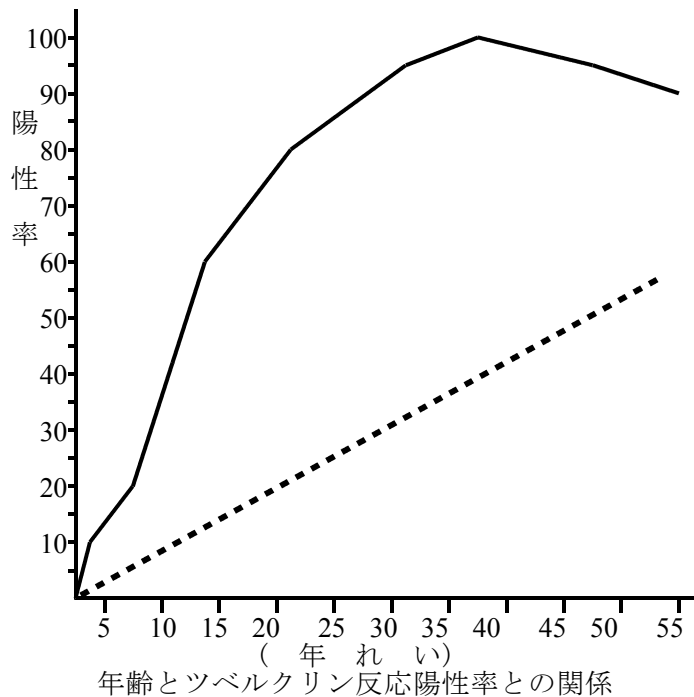
おじさんの専門は、内科のうちの、しかも肺結核の治療ですが、それについては、こんなはなしがありました。「文明国では、日本は肺結核の患者が多い國だ。これははずかしいことだと思ふ。しかも、この病氣に対する日本人の知識は、いっぱんにたいそう低い。いったん肺病にかかったという、日本では、ただ、その病人をけぎらいすればすむと考えるふうがある。傳染病だから、警戒することは大いに必要だ。しかしそういうふうにかわがっていながら、いっぽうではたんをどこへでもはきちらして平氣でいたり、人ごみのなかへいって帰ってきても、うがいもしなかつたりする。また、食事のまえに手をあらわない人も多いようだ。もっとも予防の方法をさかんにしたり、患者のベッドをふやしたり、かかってからの治療をふくうしたりすれば、肺病はそんなにおそれる必要はない。結核は、今日ではむしろなおりやすい病氣だといつてもよい。

とにかく結核の療養は、時期をにがしてはいけない。結核の療養は、一日早ければ、一箇月早くなおる。だから、早くみつけることがたいせつだ。

もともと結核病は、西暦一八八三年に、ドイツの医学者ローベルト＝コッホによって発見されたもので、菌は患者のたんのなかにたくさんふくまれているが、肉眼では見ることができない。結核に感染したかどうかをしらべるのには、科学的な検査の方法がいろいろある。その一つはツベルクリン反應の検査だ。

ツベルクリンというのは、結核菌によって作り出された一種の物質で、結核に感染するとからだにツベルクリンに対して敏感になるという性質を利用して、結核に感染したかどうかを検査する。つまり、ツベルクリンの注射によってひふが赤くはれるものは、結核に感染したことのあらうので、これをツベルクリン反應が陽性だといふのだ。

おもな病原菌の発見			(年)
(菌の名)	(発見者の名)		
チフス菌	ガフキー	エーベルト	1880
結核菌	コッホ		1883
コレラ菌	コッホ		1883
ジフテリア菌	レフレル	クレプス	1883
ペスト菌	北里柴三郎	クルーゼ	1894
赤痢菌	志賀潔	クルーゼ	1897
百日せき菌	ボルデ	ジャングー	1900



最近の統計によると、大都会で生活しているものは、満二〇歳までに約七〇パーセントが陽性になることがわかった。それが農村では、三〇パーセントくらいの低い率だ。しかし、感染したからだといって、むやみに発病するものではないからあわててはいけない。発病しているかどうかは、レントゲン検査とか、たんの検査、赤血球の沈降速度などをしらべて、たしかめることができる。

いっぽう予防の方法もだんだん科学的になってきている。近年わが國でも、かなり行われるようになったBCGがその一つだ。これは、フランスの医学者であるカルメットとグランによって発見された一種の結核菌で、これを人体にうえつけて、人工的に結核感染させ、害にはならないようにして免疫性をあたえようとするものだ。

現在は、戦争中の過労や戦後の栄養不足のため、結核になる人がひじょうにふえている。そして、今のような状態がつづけば、結核患者はいよいよふえるおそれがある。食物だけでなく、住居の状況や、交通機関や映画館のこんざつなども、ずいぶん危険といわなければならない。紙やハンケチに不自由するために、不衛生なことになれてしまった人もあるが、これなども困ったことだ。」

この病氣にかかったらどうしたらよいのですか、とうかがいますと、それは、信用のできるお医者さんのいうことをよくきいて、養生すればいいのだといって、新しい療法の話をつくもしてくださいました。

おとうさんの病氣については、

「どうもおじさんの専門のほうではないのでよくわからないが、ふだんあのくらい元氣ならそう心配することはあるまい。しかし、おとなで夜中にひきつけるのは、ごくめずらしいから、その原因をはっきりさせる必要がある。それにはひとつゆっくりと、おじさんの病院にでもはいて、いろいろな専門のお医者さんにくわしくしらべてもらうのがよい。いろいろな科の医者が、現在あるもっともよい方法でさまざまな機械の力なども借りてしらべるのだから、きつとはっきりするだろう。それでもいけなければ、大学の研究室の先生たちの力を借りてやることもできる。しかし、そんなにしないで、おとうさんの病氣の原因ぐらいは、おじさんたちの病院できつとつきとめられるだろう。

こういったことは、診察ばかりでなく、治療のほうでもやはり同じで、むずかしい病人は、内科にいたり、外科にまわされたり、耳鼻科と内科の医者が立ち会ったりして、治療する。医者というものは、人の生命をとりあつかうのだから、少しもごまかすことのできないものだ。だから、自分にはっきりしないときは、他の人の助けを求める。それがこういった専門の医者の集まっている大きな病院では、いっそうやりやすいのだ。

だからふつうの病人は、いっぱんの開業医にかかるが、むずかしい病氣にかかった人や病氣が重くなって手あてのむずかしい病人は、大きな病院にはいるわけだ。おじさんの病院なども、県内はもちろん、他の府縣からも集まってきている。

入院するとずいぶん費用がかかるように思っている人も多いが、おじさんの病院のような大学の附属病院などは、思いのほかやすあがりなのだ、だがなんといっても、病氣にならないことがいちばんだ。

みんなが病氣にならないようにすることは、公衆衛生の受けもちだ。はじめにもいったように、たんのしまつとか、うがいの励行とかのほか、寝具の日光消毒や予防注射の励行、あるいは、栄養食の研究とかいったようなことが、もっともさかんにならなければ、病人があとからあとからふえるばかりだ。この方面では、アメリカなど、ことにすぐれている。おじさんがあちらへいったのは、もう一二、三年まえのことだったが、あのころでさえ、そういう方面の研究や教育がすすんでいるのに感心した。町や村には保健所があるし、小学校・中学校などの保健衛生の設備も十分ととのえられていた。今、きみたちがいただいている学校給食なども、あちらではずっとまえからやっていた。そのご、うんと発達したという話だから、こんごも大いに研究して手本にする必要があるだろう。」

おじさんの話は、おとうさんの病氣のことから、だいぶ廣がっていきましたが、たいへんおもしろくうかがいました。そのあと、おじさんは、日本の医学はこれからもいよいよ深く研究され、またいろいろな他の学問の助けも借りて発達させなければいけないということを、戦争中イギリスで発明されたペニシリンというくすりを例にとって、話してくだ

さいました。このくすりは、肺えんや化のう性の病行きにたいそうよくきくくすりですが、これは青かびのつくり出す物から化学を應用してつくったもので、かびの研究とくすりの研究とか助けあってはじめてできたものだそうです。

おじさんは、病氣は海岸をみはらす高台の上にあつて、すぐとなりには大学の研究室もつづいているから、一度ぜひみにくるようにといいお帰りになりました。

九、街頭録音

月 日 道男

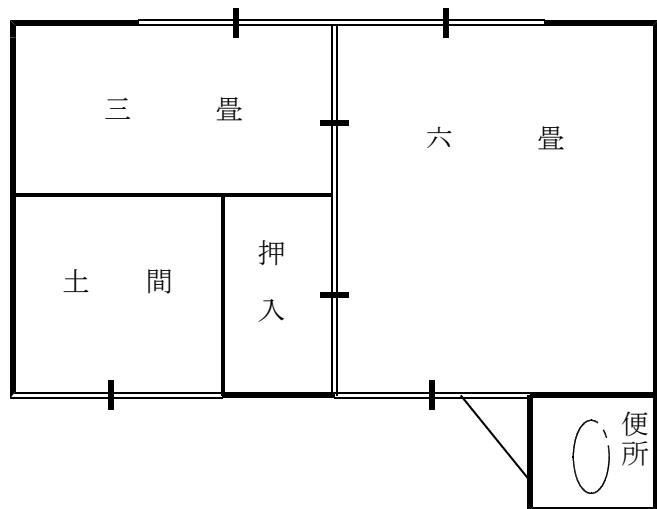
きのう午後、駅のそばで街頭録音があったので、敬一さんと見にいって。小さなあき地に、人が二、三百人集まっていた。となりのビル二階に録音する機械がすえつけてある。ここでは録音するだけでなく、発言する人の声が、集まっている人たちによく聞こえるようなくふうがしてある。

あき地には、スピーカーが四つ五つあって、話している人の姿は見えなくても、声はよく聞こえる。あき地のまんなか低台があって、その上に、放送局の人が三人立っていた。黒い野球ぼうをかぶり、街頭録音班という腕章をつけている。そのなかのひとりが、長いコードのついたマイクロフォンを、話す人の口のそばにあてがい、アナウンサーが話を進めている。

ぼくたちがいったときは、もうはじまっていたので、人のうしろの方になってしまって、話している人の顔がみえなかった。だんだん人をおしわけてなかにはいっていってみると、話したいという人が、台のちかくにならんでいた。集まった人たちの意見に対して、政府の考え方や、仕事を説明するために、戦災復興院の人もみえている。この人はなかおれをかぶり、レインコートをきていて、少しふとってはいるが、やさしい声の人だった。気がついてみると、集まっている人たちは、老人も若い人も、男も女もあり、服装もさまざまだが、大学生がたくさんいた。また敬一さんのような中学の生徒もかなりいた。小学生は、ふたりばかりへいの上にのぼってみているのがいただけだった。

はじめ、家をたてるにはどうしたらよいか、ということを中心に、おもいおもいの意見が出た。資金をどうするか、資材をどうするか、土地をどうするか、というようなことが問題になった。家の焼けない人から、税金をとったらどうか、という人もあり、家は焼けなくても、商売のなりたない人もあると、それに反対する人もあり、三角くじや宝くじのように、家のあたるくじをつくったらどうか、というえかきらしい人の話もあった。家は、あたらないけれど、その家をつくる資金のあたるくじは、都道府県で実施してもよいことになっていると、復興院の人が答えた。

しかし、結局は、政府の手で安くてよい住宅、ことにアパート式の共同住宅をたててほしいという希望や、大邸宅やあいている建物をもっと開放するのがよい、という意見が強かった。長いひげのおじいさんが、木や竹を少し使って、土で家をつくったらよいのだといったが、少しこっけいなおじいさんで、きいている人はおとぎ話のようだ、と笑った。ぼくは、おじいさんの考えを研究してみたらどうかと思った。

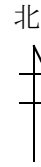
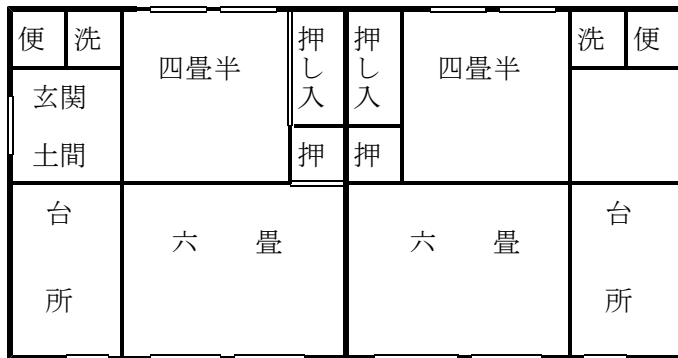


應急簡易住宅

次には、貸間についての意見をいう

ように、アナウンサーがたのんだ。中年のおばさんが、まえに政府が大住宅の開放を強く要求したとき、それではといて貸してくれた家主が、このごろ政府があまりやかましくいわないので、へやを貸しておくのがいやになって、理由をつけて追い立てているのだと、話しそうに話した。若い男の人が、大きな住宅やあいている事務所などを使えば、もっと貸間ができるといった。元気のよいおばさんが、私は家主のほうですがといて、アパートやっていくのもなかなかたいへんだということや、しかし、貸す人も借りる人も、困ることや苦しいことをお互いにうちあけていけば、おいたてたりすることはないと話した。アナウンサーが、おばさんのところでは、どのぐらいのへや代ですかときいたら、四畳半

で二〇円、六畳で三〇円です、と答えた。だれかが、なるほど安いと感心していた。



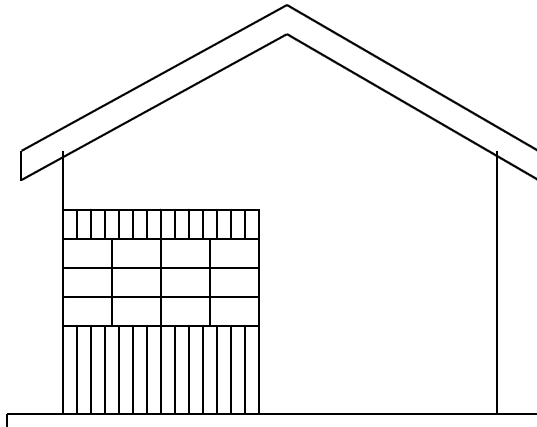
戦災復興院設計の国民住宅 1戸当たり 36 m²

話は自然にまえにもどって、住宅をたてることや、貸間をつくることになったが、そのうち復興院の人に、ひとりあたりどのくらいの廣さを目標にして家をつくるかという質問がでたところ。おとなひとり二畳半から三畳であると説明された。たとえば、現在わが國の一家族を平均五名とみつもっても、六畳、四畳半に台所押入などをつけたものくらいのざいりょうもせつやくでき、住みごこちもよいという家やコ

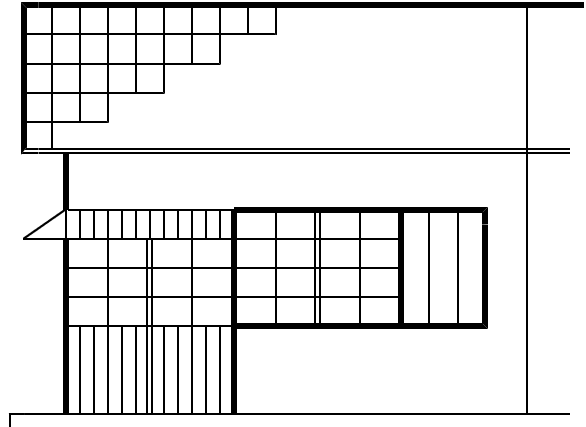
ンクリートなどのもえないアパートを、多くたてようとしているということであった。ぼくは、あまりそまつな家ばかりたてて、あとで困らないかと考えた。

時間がなくなっていくにつれて、アナウンサーは、だいぶいそぎはじめた。話す人もなるべく同じことをいわないようにし、きいている人も、「だっせん、だっせん、」とか「かたん、かたん」とかいて、なるべくたくさんの人たちからちがった意見をきこうとしていた。資材の輸送に努力せよという人や、政府の計画を確実に実行してもらいたい人などがあつた。

西面図



南面図



街頭録音は、ただおもしろいからやるのではなく、たいせつなことがらについて、できるだけいろいろな人の意見をきいて、みんなの生活をよくしていくためのものだから、じょうずに話をする必要があることがわかつた。

さいごに責任者から、貿易が再開されても、ほかに輸入しなければならない物資がたくさんあるので、住宅をたてることは、決して容易にはならないということ、統制に反して建築をすることが、政府の計画を実施する場合大きな障害であるということの説明があり、アナウンサーのお礼のあいさつがあつて録音がおわつた。きいていた人たちもみな拍手して解散した。

解散後も、二、三〇人の人が、復興院の人やアナウンサーをとりまいて、質問をしたり、意見をいったり、たのみごとをしたりしていた。放送局の人がマイクや拡声器をとりかた

づけても、やはりその人たちは熱心で帰らなかった。

ぼくは、放送局の人に、この録音は、いつ放送されるかときいてみた。係の人はわざわざほかの人にききあわせて、たぶん来週の木曜の夜になるはずです、と教えてくれた。

敬一さんは、中央の台のそばにあった大きなスピーカーみたいなものが、何をするものか、ときいた。これは集音機といって、きき手の笑い声や拍手など、その場のありさまを示す音をおさめるものであった。

敬一さんの話では、放送局の人たちは、きょう録音したものを、うまくへんしゅうして、放送するのだそうだ。街頭録音の放送をきいていると、すぐその場所から放送しているような感じがするが、係の人はさぞ苦心することだろう。

家に帰ってから、年鑑で住宅難のことをしらべてみたら、厚生省では、次のような推定をしていると書いてあった。

戦災でなくなった住宅は、被害建物二四六万戸のうち、二一〇万戸、強制疎開でなくなったものは、取りこわし建物六一万戸のうち、五五万戸、両方を合わせると、二六五万戸で、戦前のわが國の住宅総数をだいたい一四〇〇万戸とすれば、戦争による減少だけを考えても、現在は一一三五万戸で、戦前の八〇パーセントしかない。

また、都市だけをとってみると、戦前六〇〇万戸が、現在は三三五万戸になり、五六パーセントしか残っていないことになる。

このほか、引きあげてきた人たちのために六七万戸、今後一〇ヶ年間に、世帯が増加するために入用になるものが一〇万戸、戦争中、建設をあわせたために必要になっているもの一一八万戸、今後一〇ヶ年間に使用が不可能になるもの一〇万戸（風水害によるもの四万戸、火災によるもの一万戸、自然にくさってしまうもの五万戸）があつて、住宅難をいよいよひどくしている。

これに対して戦災死等のために需要の減少する分は、三〇万戸にすぎないそうである。このことをしらべてみたり、ひとりあたりの住宅の廣さをきいたりすると、ぼくたちの家が、満員電車になっているのもあたりまえのような気がした。